

株式会社シマダ

訪問者

(公社)東京都ベストコントロール協会理事 広報委員長 葛西 晋平

秋雨前線が一段落し、気持ちの良い晴天の10月某日。6回目を迎える会員訪問シリーズとしてお邪魔したのは、東京文京区に本社を置く「株式会社 シマダ」である。

文京区は23区の中心よりやや北に位置し、明治時代より夏目漱石や森鷗外、宮澤賢二等、著名な文人、学者、政治家が多く集まる街であった為、「文の京(ふみのみやこ)」などと言われる。本郷、小石川、目白台などの閑静な住宅地が多く存在し、また出版や印刷、教育機関、医療機関も多い。また、音羽の森や、六義園などの歴史ある広大な庭園も有名だ。余計な話だが、筆者が文京区のウンチクを調べていて驚いたのは、区内にJRの駅が一つもないのだそうだ(当然のようにありそうなのだが…どうでもよい話でした)。歴史的にも名を残しているものとして、1884年(明治17年)に向ヶ丘弥生町(現在の弥生一丁目)で発見された土器は、その発見地から弥生式土器と命名され、弥生時代の名の由来となっている。

今回お邪魔した「株式会社 シマダ」は、東京都文京区水道2-5-4に本社を構え、葛西が10月14日に訪問した。代表取締役嶋田久和さん、専務の蒲田春樹さん、役員勝浦寿江さんのお三方にお迎え頂き、色々お話を伺った。ご多忙の中、お時間頂戴したことに深い謝意を表します。

(葛西) 本日はお忙しい中、皆様でお迎え頂き大変恐縮しております。ありがとうございます。特に、嶋田社長様には初めてお目にかかりますが、本日はよろしく願いいたします。

(嶋田社長) お父上にはお目にかかった事がありますが、葛西さんは初めてですね。よろしく願いいたします。

(葛西) 蒲田専務さんには、協会での「感染症予防衛生隊」担当委員長として、ご苦労をお掛けしています。私のみならず、感染症予防に携わる協会員が共に勉強

させていただいておりますが、貴社の考える感染症対策やPCO業務などを含め、「株式会社シマダ」全体のお話を伺って行きたいと思います。



石切橋脇にある、株式会社シマダ本社

株式会社シマダ

まず、社長さんの略歴を教えてくださいませんか？

(嶋田) 当社の創業は昭和58年ですが、それからさかのぼること数年前、私が大学を卒業した当時、世はオイルショック^(*)の頃でした。インフレが酷く景気が非常に悪かったんですね。大学を卒業しても就職が難しく、どうしようか思いました。そんな時に、「まだあまり人がやっていないような仕事」、「且つ社会貢献も出来るような仕事はないだろうか?」と考えてみたんです。頭に浮かんだのは、「これからは家やビルがどんどんできるだろうから造園業や清掃業など建築物に携わる仕事がいいのではないか」と思いまして、そこで建物管理の一環である消毒の仕事をやろうと決めたのです。害虫駆除などの作業を行う事で、環境衛生保持の点でも世の中の為にもなると思いましたから。その際、某PCOの会社さんにお世話になりました。私がこの業界に携わることになったきっかけですね。駆け出し当初どれくらい勉強すればなんて考えずにがむしゃらにやりましたが、結果的に7年ビッシリと勉強させて頂きました。

(葛西) その後独立なさったとの事ですが、不安感などは全く無かったのですか？

(嶋田) 技術や知識に関して勉強しましたからほぼ問題は無かったですが、営業に関しては不安は有りましたよ、経験ありませんから。しかし、お世話になっていたPCO会社の上司の方々が「大丈夫だ、しっかりやってこい。ちゃんと応援してやる」と背中を押してくれたお

かげで独立できたのですね。29才9か月の時です。当時の社名は「シマダ消毒株式会社」。私とバイトで駆けずり回っていました。2年後に専務が加わりましたが、それでも少人数で昼も夜もバタバタやっていました。大口のお客さまより細かい飲食店とかが多く、ゴキブリ、ネズミ、シロアリ何でもやりました。仕事はとにかくあるのですが、作業者が少なくてきつかったですね。世は丁度バブル期に突入しようとしていたから、景気は良い時でした。

でも、それゆえこんな汚れ仕事に就こうと言う人間は少なかった(笑)。



嶋田社長以下、役員の方々に迎えて頂いた

(葛西) 昭和のPCOそのままの会社ですね(笑)。さて、そんな中のお話ですが…取材前の予習時に、御社の取扱業務として“大動物の防疫業務”というのを見つけたのですが、PCOの業務を行いながら、どのタイミングで防疫業務を手掛ける事になったのですか？

また、それにまつわるご苦労などあったら教えてください。

(嶋田) 日々の業務に追われながらも、もち

ろん営業も自分でやる訳です。その当時たまたまご縁があり、ある方を介して大動物の施設等の殺菌をお手伝いするようになりました。そちらはゴキブリやダニ等の殺虫とは違い、細菌やウィルスの対策です。

大動物を扱う業界は内規もそうですし、国際的なルールとしても感染症に対して非常に厳格なものが有ります。ウィルスが蔓延すると(発熱や発疹等により)莫大な損失が発生します。なぜならそれまで莫大な時間とお金をかけて研究されていますので、その具現化された大動物自体の損失も非常に大きいものとなるのです。

(葛西) どんな病気が有るのですか? また、人獣共通感染症などはどのようなのでしょうか?

(蒲田専務) 私の方からお話しします。まず人獣共通感染症ですが、もちろんあります。ただし、国内での発生例は稀で私どもの防疫の対象にはなっていません。主な対象としては、まずインフルエンザですね。それとゲタウィルス。後は脳炎ウィルスなどですね。

(葛西) インフルエンザは大体解りますが、ゲタウィルスとはどんなもののでしょうか?

(蒲田) 国内に於いて初めて確認されたのは、昭和53年茨城県でした。発熱や発疹、四肢の浮腫(足のむくみ)が主な症状です。ただの乗馬用の馬や農耕馬であれば、休ませれば良いわけですが、競走馬は全てプログラムが組まれているので、そのタイミングで罹患していると競争に影響が出るわけです。もちろん

他の馬にも感染してしまい、被害が拡大してしまいます。致死率は低いですが、先にも申しましたように、開催に影響が出たりするわけです。

ゲタウィルスは“キンイロヤブカ”や“コガタアカイエカ”が媒介するので、施設周りの衛生害虫駆除も重要になりますし、併せて施設内外の殺菌消毒も行います。

繰り返しになりますが、感染症の予防・流行を阻止する事を防疫と考え、我々はその一部を担うと言う自覚を持って、日々作業にあたっているわけです。

(葛西) なるほど、ありがとうございます。ちなみに殺菌剤はどの様なものを使うのですか?

(蒲田) 人間の物とは若干の成分の違いはありますが、いわゆる逆性石鹼等の薬剤を使います。多くの細菌やウィルスに効果があり、安全性も高いです。施設の消毒だけでなく、授乳時の乳房の殺菌や、動物の手術や外傷などの消毒にも使われるものです。まあ人間には使いませんが(笑)

(葛西) 一連のお話を伺っていると、携わっていない人間からすれば、何やら非常に大変な作業に感じますね。

(蒲田) 作業自体は単純なものです。敷地が非常に広大なのと、終わりが無い作業ですから。それと作業のスケジュールは、ほぼすべて相手からの指示によるものなので、いきなり変更があった場合など、人の手配が大変ですね。

(葛西) ありがとうございます。では、大動

株式会社シマダ

物の防疫・PCO業務以外の他の業務についても教えてください。



事務所内の様子

(勝浦) 私は現場に出ている人間ではないですが、管理する立場からお話しさせていただきます。先ほど嶋田の話に出ましたように、独立当初からPCO業務を行っていましたが、当然隣接する業務として清掃を含む建物の総合管理に業務を拡大しました。しかし競合他社が多いですし、ある程度、建物の需要も飽和状態になってきていますので、業務として現在は伸びる要素(受注、売り上げ等)が少ないのですね。そうすると当然そこに傾注するわけにはいきませんので、先の大動物の防疫業務を更に拡大させるか、社内に於ける新規の業種を育てていかなければなりません。そういう意味で「マリーン部門」や「光触媒部門」を当社に於ける可能性と位置付け、立ち上げました。「マリーン部門」は弊社の防疫知識、技術を生かし海運、レジャーに於ける船舶の消毒を行います。もちろん海外からの重篤な感染症の侵入を水際で阻止する役割も想定してい

ますが、もっと身近な小型船内の清掃・抗菌・脱臭なども含まれます。「光触媒部門」は光触媒を利用し、汚れの接着剤としての有機物を安全かつ容易に分解できる点に注目し、家屋外壁や車体・船体等の表面維持に効果を発揮するので、お客様の財産保持のお手伝いが出来ます。そちらも今後、ますます力を入れて取り組みたいと思っています。



(葛西) 色々お話を伺って、御社がどんな企業なのか理解できました。最後に、テーマは何でも結構です。会社、業界、その他感じてらっしゃること、今後の展望、お考えをお聞かせください。えーと、どなた様がお話になりますか？



(蒲田) では私が話します。人材に関して私が感じていることなのですが、業種毎にプロフェッショナルを育成する事はとても大事な事だと思います。しかし会社の規模によっては、固定費(人件費)を積み増していくことは非常にリスクになっております。もちろん各々ふさわしい人材をあてがう必要性を感じない訳では無いのですが、海の物とも山の物とも解らない新人や中途採用の人材を、その都度確保する事の怖さが有りますね。育たない、辞めてしまう、思った様に伸びてくれないなど、もちろん指導する側の責任もあるのですが、それらを天秤にかけると、私自身も含めオールラウンダー(蒲田さんご自身で現場調査などにも出向かれている)にならざるを得ない。世の中が、景気が、仕事かと余所よその所為せいにしてばかりではいけないのは解っていますが、あくまで私個人の感想として、社内で今後の人材を育成していく難しさを感じています。黙っていても右肩上がりで成長していく時代ではないですからね。算盤そろばんばかりはじいてはいけませんので

すが…。

(葛西) そうですね、それは私もいつも頭を抱えています。一定以上の企業規模を超えてしまえば解消される部分もあるのですが、中小はなかなか思い切った踏み出しが出来ないですね。仕事に対し、しっかりした理想や考えがあれば尚更だと思います。

長時間にわたり蒲田さん、勝浦さんありがとうございました(嶋田さんは、打ち合わせにより途中退席された)。

※1：1973年10月の第四次中東戦争の勃発に伴う産油国の価格引き上げに端を発した第一次オイルショックから、1979年のイラン革命によりイランの石油生産が中断した第二次オイルショック(日本はイランから大量の原油を購入していた)により、エネルギー革命を迎え、エネルギー源を石油に置き換えていた日本は、ニクソン・ショックから立ち直りかけていた景気を直撃した。急激なインフレーションや、石油危機により相次いだ便乗値上げなど更にインフレが加速していった。

